



『遺書屋』 十通目  
・・・津波（無料）

---

---

湊 覚（みなと かく）

---

## 十通目・・・津波①

---

「あれっ？」

「あらっ？」

「じ、地震？」

「そ、そうみたい。大きくない？」

「お、大きそう。ま、まだ、うわあ～。た、立っていらんない！」

「は、早く、テ、テーブルの下に隠れて！」

「わ、分かった！」

ピンポン ピンポン ピンポンドンドン

「だ、誰なんだ、こんな時に！」

「お、お願い、見てきて」

「わ、分かった！ あっ、また揺れた！」

這(は)いずりながら、玄関のドアを開けた。

「あ、ありがとう！」

と言って入ってきたのは、刑事さんだった。

「た、たまたま通りかかったら、こ、この地震にあった」

「は、早く入ってください」

「お、おお」

と言って、玄関から入ってくるなり、靴も脱がずにテーブルの下に潜り込んだ。

「なんだ、これは！」

「じ、地震です」

「そんなことは分かっている！ テレビを点けてみろ！」

「は、はい」

と言って、アナログ・テレビを点けた。隣の人が、デジタル・テレビを購入したので、廃棄するにもお金がかかるので、押し付けられた物だった。

そこには、目を背けたくなるような光景が写っていた。震源地から、こんなに離れているのに凄い揺れを感じた。何度か余震が続いたが、少し落ち着いて来た。

テレビでは、津波の注意を盛んに話しをしていたが、ここは海から離れているし、川からも離れていたもので安心してた。

地震が発生してから余震が続いていたが、3人は冷蔵庫から牛乳パックを取り出し、椅子に座って飲み始めていた。

最初の大地震から数十分ほど経った時、テレビに映った映像は、ゆっくりと動いているゴミの流れだった。しかし、そのゴミはゆっくりと、海から川上に向かって流れていた。そばにミニカーのような車が走っている。車は、ゴミの流れから遠ざかろうとしているように見えたが、その動きはゴミの流れよりも非常に遅く感じられた。俺は慌てて、

「逃げろ！」

と叫びながら、テレビに指を押し当て、パソコン・ゲームのように指で車を進めようとしたが、画面が切り替わってしまった。

『俺は、何をめているのだろうか？ これは、なんなんだ！』

と思った途端に、大きな余震が襲って来た。

「わ、わぁ～」

「は、早くテーブルの下に来て！」

「な、何をやっているんだ！ テレビの画面なんて触(さわ)ってやがって！ こっちに來い、馬鹿やろ～！」

『日本が終わるのか？ こんなことで、俺の命が消えちゃうのか！ 俺達、「遺書屋」は、この人達に何も出来ないのか！』

と思ったが、大きな余震のたびに、机の下に潜りこんでいる自分が、ここにいた。

テレビには、大都会の人達が家に帰るために乗った車の渋滞の映像が映されていた。

「おい、こんなことがあって良いのか！ 16年前にも大地震があったよな。あの時も多くの人々が亡くなった。まさか、ここで、こんなに大きな揺れがあるなんて、どうなっているんだ。もうすぐ定年のワシも、これだけの揺れは初めて経験した！」

テレビから、女性のアナウンサーが悲鳴に近い声で話す言葉が聞こえてきた。

「ご覧ください！ 津波が近付いています。老人ホームの老人達を、ヘルパーが高台に誘導しています！ リレーのように、こちらの高台に誘導しています！ 見えますか？ 見えますか？ あっ、また一人の老人を連れて、ホームから出て来ました！ もう、津波が老人ホームまで近付いてきました！

あっ、先ほどのヘルパーさんが、ホームに戻っていきます！ まだ、老人ホーム内に残っているのでしょうか！ そ、それにしても、早くしないと間に……」

画面がスタジオに切り替わり、

「それでは、他地区の被害状況をお伝えします……」

と話し出していた。

「あ、あの人、ど、どうなっちゃったんだろう！」

「お前の気持ちは分かるが忘れろ！ 忘れるんだ！ いいな！」

「は、はい。で、でも……」

「五月蠅(うるさ)い！ 忘れろ！」

これは、現実なのだろうか！ 夢なら覚めて欲しい！

また、小さな揺れを感じた。

テレビの画面が、先ほどの老人ホームを写していた場面に戻っていた。

さっきの女性アナウンサーが興奮気味に、

「ご覧ください！ 先ほどの老人ホームが津波に飲み込まれています！ 信じられません！ 先ほどのヘルパーさんも、あれから老人ホームから出てきません！ 同じ老人ホームに勤めていた人に、あのヘルパーさんのお話を聞きました。あの人のお名前は……」

「ねえ！ 今の人のお名前を聞いた！！！」

「ま、まさか！ ち、違うよな！ 違うよね！」

「でも、あの人からのメールから判断すると……」

「う、嘘だ！ 嘘だ！」

「どうしたんだ、お前達？」

「実は2日前、同じ名前の人から『遺書』が届いたのです。そこには、

『震度3の地震がありました。それから、何度も何度も地震が続いています。まさか、ここに大地震が来るとは思えませんが、もし私が、ここで死んでしまったら、この気持ちを残したままになってしまいます。』

インターネットで「遺書屋」を知りました。すでに、お金は振り込んであります。今は、少しだけですが、仕事が続けられたら、また追加で振り込みますので、お願いいたします。

「遺書」が書けて、少しだけホッと出来ました。

大地震が起きないことを願っています。私も、やっと、人のために仕事をやれるようになったので、出来れば、もう少しこの仕事を続けたいからです。

でも、今の時代、死んでしまうのは、地震だけではないですからね。

パスワードをお知らせしておきます。私が住んでいる住所の数字を並べたものです。

万一の場合には、お手数をお掛けしますが、よろしくお願いいたします』

と書いてありました」

「ワシにどうしろと？」

「この『遺書』を、その人からの『遺書』として良いのでしょうか？」

「細かいことは分からんが、その人から来たメールが開ければ良いんじゃないかな。

元々、お前達に来たメールなんだからな」

「分かりました。ねえ、住所を覚えている？」

「もちろん。一丁目二番地の三だから、123ですね。それでは、あの人から届いたメールに添付された、この『遺書』を開いてみます…。

あれっ、パスワード・エラーになったよ？ 違う人なのかな？」

「パスワードが違っているの？ おかしいわね？ 住所は、合っているの？」

「この人の住所は…。 あっ、市名に数字が含まれていた。 もう一度、パスワードを打ってみるよ」

パソコンの画面には、その人からの『遺書』が表示された。

「刑事さん、お休みなさい」

「おお、そうだった。ワシは『遺書屋』じゃないからな。お休み。グーグーグー」

「刑事さんは寝てしまったから、『遺書』を読んでくれる。刑事…いや、私に聞こえるように大きな声でね」

「ああ、分かったよ。読むよ、

『私は死んでしまったのですね。

実は、私は十年前に殺人を犯してしまいました』」

「な、何！」

「刑事さんは、寝ているのでしょうか？」

「ああ、そうだった、そうだった」

「『真面目に仕事をしていた私は、ある日、突然に「悪いが、会社の経営が良くないんだ。来月から、君は会社に来なくて良いからね』と言われてしまいました。今なら、会社を相手取って、裁判所に訴えたかも知れませんが、その時は、ただ黙(だま)って会社をやめました。

次の仕事が見つからず、すぐに退職金を使い果たしてしまいました。

お金に困った私は、ある家に強盗に入りました。ただ、大金持ちの人から、少しだけ分けてもらおうと思っただけなのですが、そこのご主人が起きて来てしまったのです。

そして私は、その人を殺してしまいました。殺してしまったのです。

私は、自首する勇気もありませんでした。

盗んだお金を持って逃げたのです。

申し訳ありませんが、その奥さんに謝って欲しいのです。

自分で謝りたいのですが、勇気がなくて…。

こんな、甘い願いをして、叶えてくれるとは思っていません。だから、その勇気が出るまで、この「遺書」を預かって欲しかったのです。

あなたが言うように、「遺書」を書いてみるのも良いものですね。

でも、この地震がちょっと心配です』…」

その後、殺してしまった人の名前と住所が書かれていた。その住所は、ここからでは簡単に行けそうもないところだった。

「やっぱり、亡くなったヘルパーさんからの『遺書』のようね」

「お前達、どうするんだ」

二人揃って、

「『遺書屋』ですから」

と言った。

「仕方がねえな。お前達には調べきれねえだろうから、その殺しちまった『主人』って奴を調べてやるよ。あんな場面を見ちまったから、ワシにも手伝わせてくれ。良いだろう」

「お、お願いします」

「私からも、お願いします。あんなに一生懸命、人を助けようとしていた人の願いを叶えてあげたいのです。事件のことと、その後の奥さんのことを調べていただけますか？ その後は、私達『遺書屋』の仕事ですから…」

「ああ、分かっているよ。殺されたと言う主人が住んでいるところには、ワシの碁敵(ごがたき)の刑事がいるから調べてもらうよ。

インターネットとは便利なものだ。どんなに遠く離れていても、碁が打てるんだからな」

「あ、ありがとうございます」

「お前のためにやるんじゃない！」

「は、はい」

「じゃあな」

と言って、刑事さんは帰っていった。

「分かったら、どうする？」

「そ、それは、あの人が俺達に叶えて欲しかったことを、叶えてあげることだよ」

「そうね。『遺書屋』だもんね」

「そう、『遺書屋』だから…。

あっ、また余震が来た！」



数日して、

「おい、分かったぞ！」

と言って、刑事さんがやって来た。そして、

「ああ、十年前に、その事件が起きていたよ。そして、ご主人は死んでしまっていた。ただし、ケガで死んだ訳じゃなくて、病院に運ばれて調べてみたらガンだったんだってよ。それから一年入院していたが、死んでしまった。

奥さんは、あの家を売り払って、ここに住んでるよ。ここから、そんなに遠くないところだ。後は、お前達『遺書屋』の仕事だ。

じゃあな」

と、自分の言いたいことだけを喋(しゃべ)って帰っていった。

「良かった。あの人、殺人を犯していなかったんですね」

「ええ、ホッとしたわ」

「さて、住所が分かったから、行ってみようか」

「強くなったのね」

「君と刑事さんがいるからね」



「すみません。奥さん、おりますか？」

「はい、どなたでしょうか？」

「私、ご主人様と一緒に仕事をしていた父の娘です」

「そうですか。どうぞ、お入りください。後ろの方は？」

「兄です」

「そうですか。わざわざ、ありがとうございます。どうぞ、お入りください」

と言われ、おじやました。

「わざわざ、お出でいただき、ありがとうございます。今日は、どんなご用事で？」

「はい、父が亡くなって遺品を整理していたら、ご主人様が強盗に入られたことや、その後にガンが見つかったことが書かれた日記のようなものがあったのです。それで、その時のことを知りたくたって来てしまいました。出来ましたら、その時のことをお聞かせ願えないでしょうか？」

「他に、どんなことが書かれていたのですか？」

「それは・・・」

「話さなくても良いですよ。あの人、自分勝手な人でしたからね。多分、あなた達のお父様も苦労していたと思いますわ。

もう、ガンで亡くなって、十年も経(た)ってしまったのね。

冷たいと思わないでね。もし、あの事件がなかったら、私が主人を殺していたかも知れなかったわ。本当に辛(つら)かった。いつも殴られていたの。殺されると、何度も思ったわ。でも、あの人は顔だけは殴らなかった。顔を殴ると、買い物に行けなくなることを知っていたのね。

十年前に、強盗に入られたことがあったの。強盗が帰ろうとした時に、主人が起き出して、その人に声をかけたの。その強盗は、すぐに土下座をして謝ったのよ。でも、それを見た主人は、相手が弱い

と思って、足蹴(あしげ)にしたの。私は恐くて、ドアの外で覗(のぞ)いてみていたの。強盗は、何度も何度も詫(わ)びていたのに、主人は、警察に連れて行くと言って、襟首(えりくび)をつかんで立たせようとした。その時だったわ。強盗は、あきらめたように、立ち上がったの。主人は、驚いて一歩下がった途端に、後ろのテーブルにぶつかって倒れてしまい、頭を強く打って気を失ってしまいました。強盗は、申し訳ありませんと言って、玄関から逃げて行ったわ。私は、急いで救急車を呼んだの。すぐに救急車が来てくれたわ。そして、病院に行ったら、ケガはたいしたことはなかったけど、ガンが見つかったの。

それから私にとっては、幸せな生活が続いたわ。弱ってしまった主人を、優しく看病できたのよ。その時、初めて、私は、この人を看病するために、結婚したのだと思いました。でも、楽しい生活は、一年で終わってしまいました。

強盗を恨んでいますか、ですって？

いいえ、その人のお陰で、ガンが見つかったのですもの。感謝すれこそ、恨むなんて。

盗まれたお金も、微々(びび)たるものでした。

主人が、あなた達のお父様に、何をしたのか分かりませんが、許してあげてくださいね。主人も、亡くなっているのですから」

「ありがとうございます。良く分かりました。亡くなってしまった父も、何も言わないと思いますわ」

◇

「これで、亡くなってしまったヘルパーさんも、安心したのじゃないかしら」

「ええ、きっとホツとしていると思うよ。

でも、ヘルパーになるために、盗んだお金でホームレスから戸籍を買ったなんて、信じられないことが書いてありましたね」

「そうね。ホームレスも、お金のためなら、自分を捨ててしまっても良いと思ったのでしょうかね」

.....

あのヘルパーさんは、自分で謝りに行きたかっただろうな。

まさか、あの津波で死んでしまうとは思わなかつただろうな。

「何を考えているの？」

「みんな、明日があることを信じて生きているのに」

「だから、今日を、今を大事にしなきゃ。無駄に過ごせないわね」

「そうだね」